

軽蔑されていた羊飼いたち

THOSE DIRTY SHEPHERDS

マリア・フォンテーン



イエス・キリストが生まれた夜について、聖書にはこう記されています。

さて、この地方で羊飼いたちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に神をさんびして言った、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなる人々に平和があるように」。

御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。(ルカによる福音書 2:8-17)

子どもの頃、数あるイエス様の絵の中で私のお気に入りだったのは、イエス様を良き羊飼いと描き、子羊を肩にのせている絵でした。もしあなたが私のように考えるなら、イエス様が生まれた夜に、丘で羊の番をしていた羊飼いたちは、尊敬された社会の一員であり、正直で信頼の置ける実直な証人とみなされていたと思うかもしれません。そうでなかったなら、天使から、神の子の到来を証言するという大切なメッセージを託されたりはしなかったと考えたからです。

でも、実際には、そうではなかったようです。歴史家によると、1世紀のパレスチナにおいて、羊飼いは、社会の底辺とみなされていました。パリサイ人が彼らを指すのに使った言葉は、「罪びと」と訳されたりしていますが、これは、汚らわしく、儀礼的に不浄という意味の軽蔑語です。羊飼いは、生涯、

動物の世話をし、糞がいっぱい、病気もありそうな戸外で眠ることもしばしばでした。神に捧げものをするにもふさわしくないとわかっていました。

人間の限られた物の見方からすると、神は、神の子(イエス・キリスト)の歓迎の集いのために、また、耳を傾ける人皆に救いの良き知らせを広めるために、社会ののけ者たちの一団を送られたわけです。今で言うと、ゴミ捨て場をあさる人たちの前に天使たちが現れて歌を歌うようなものかもしれません。しかし、神は心を見られるのです。職業や身なりは関係ありません。

聖書には、羊飼いたちは赤ん坊を見ようと急いで行ったとあるので、風呂に入ったり、きれいな服に着替えたりする時間はなかったことなのでしょう。どちらにせよ、きれいな服などなかったかもしれません。とにかく、そのままの格好で走って

丘を下り、救い主のところに行ったのでした。彼らが興奮して自分たちに起こったことをマリヤとヨセフに話し、愛をもって彼らを迎え入れてもらう様子が目に浮かびます。

神はなぜ羊飼いを選ばれたのでしょうか。この素晴らしい栄誉を、どうして、人間から見たら全くふさわしくない者たちにお与えになったのでしょうか。きっと神は、彼らなら純粋で単純な信仰をもって信じてくれると知っておられたのでしょう。そして、熱い思いで、生まれたばかりの神の子のもとに走って行ってくれると当てにすることができたのでしょう。

その羊飼いたちは神から高く評価されただけでなく、良き知らせを他の人たちに広めるという特別な任務を授かりました。救い主の誕生を他の人たちに告げることで、彼らは最初のクリスチャン宣教師となったわけです。